

『男の自立は料理から』

愛知県一宮市 千里同風

定年退職を迎えた日、妻からの何気ない一言「あなたも、そろそろ料理くらい覚えなさいよ」今思えば予告だったのかもしれない。彼女はその後、突然この世を去った。あまりにも突如な妻との別れ、「さよなら」も言わずに旅立ってしまった妻。

妻の急逝は、人生の大きな喪失だった。食卓が急に寒くなった。湯気の立たない食事、話し相手のいない夕飯。「おひとり様」という言葉が、こんなにも重く感じるとは思わなかった。最初の頃は、食べることで体が億劫だった。冷蔵庫の中身を前に立ち尽くす日々。味噌汁ひとつ作れない自分に、情けなさど孤独が押し寄せる。仕方なくコンビニの弁当を買っては、テレビの音だけを相手に黙々と口に運ぶ。味がしないのは、料理のせいではなく、心のせいだった。

意を決して「男の料理教室」に申し込んだ。

参加者は皆、似たような境遇の男たち。妻を亡くし

た人、離婚した人、独身を貫いてきた人。包丁の持ち方から始まり、だしの取り方、野菜の切り方、そして「人に食べさせる料理」ではなく「自分のための料理」を学ぶ。

初めて作った卵焼きは、焦げていた。でも、ふわりと香る出汁の匂いに涙がこぼれた。妻がよく作ってくれた味だった。料理は、記憶を呼び起こす。そして、記憶は人を生かす。

寂しい食卓は、今も変わらない。けれど、そこに「自分で作った料理」があるだけで、少しだけ心が温まる。

男の料理教室は、私に「生きる味」を教えてくれた。自炊は、男の自立の第一歩だ。誰かに頼らず、自分の命を自分で支えること。食卓に並ぶ一汁一菜は、ささやかながら誇りの証。料理教室の帰り道、スーパーで買い物をする自分の姿に、少しだけ自信が持てた。

亡き妻の遺影に向かい、話しかけてみる。

「あなたも、そろそろ料理くらい覚えなさいよ」彼女の言葉今でも私の胸に宿っている。